



ビルマの子どもたちの教育は、今

やぎさわ かつまさ
八木沢 克昌

●シャンティ国際ボランティア会 (SVA)・アジア地域ディレクター

2012年は、ビルマ（ミャンマー）にとって世界中から熱い視線が注がれることとなった。6月3日、民主化のリーダーのアウンサンスーチーさんの24年ぶりの外遊。隣国タイでの世界経済フォーラム、東アジア会議への参加、ビルマからタイ国内に300万人が暮らす移民労働者の最大の街の一つ、バンコク郊外の漁港と海鮮市場で知られるマハチャイの街、国境のミャンマー難民キャンプ訪問等を皮切りに欧米諸国の歴史的な外遊が実現した。外遊というよりは、実に24年ぶりにビルマ以外への外国の渡航が許されたことになる。

アメリカのオバマ大統領は11月19日現職の大統領として初めてビルマを訪問したことでも世界から熱い注目を集めた。世界中からビルマの豊富な天然資源と安い労働力、質の高い労働力と潜在力を見越しての投資や企業進出等の訪問ラッシュに沸き、さらには観光にも力を入れたビルマ。

こうした一連の動きは、1年前の2011年の初頭には誰が想像しただろうか。バンコクからのヤンゴン行きの飛行機は、満席状態が続く。日本からも全日空が成田・ヤンゴン間の直行便を再開。ヤンゴンのホテルは慢性的に不足。ホテルの宿泊料金は1年前の2倍から3倍に値上がり。ヤンゴンの街は急激に車が増えて交通渋滞、ホテル等の建設ラッシュが続いている。

こうした中で10月23日から11月3日まで、ビルマ国内を訪問してSVAとしての新事務所開設に向けた事業形成調査を行うため訪問した。主に教育分野、出版、図書館の分野についてヤンゴン周辺、首都ネピドー、中部のバゴー管区を訪問した。以下、ビルマの地方の典型的な子どもたちの教育事情を現していた夜間小学校を紹介する。首都ヤ

ンゴンから北西に車で5時間、300キロ離れたバゴー管区の古都パイ、この子どもたちの学ぶ夜間小学校はパイの町はずれにあった。

夜8時近く、真っ暗闇のお寺の中を恐る恐る歩くと薄暗い建設中の民家に案内された。民家が仮教室となっており、教室といっても黒板があるだけで、20人いる子どもたちは地面にゴザを引いて座っている。日中働くために小学校に通学出来なかったか、途中で退学したかの10才から13才までの子どもたちが夕方6時から8時まで学ぶ。

この学校を支援するのは、ビルマ教育省の外郭団体であるビルマ識字リソースセンター（MLRC）やユニセフなどである。現在のビルマの教育制度は、小学校が5年、中学校が4年、そして、高校が2年の5：4：2制、大学は、3～6年制で学部によって異なる。

現在のビルマでは小学校の5年生を卒業できるのは、入学した子どもの50パーセントのみ。卒業できない理由は、両親が貧乏で子どもも働かなければならないからだ。従って、学校のクラスは夜の時間とならざるを得ない。ビルマ全土では、小学校に行っていない小学校就学年齢の児童は少なくとも58万人以上いるといわれている。

この夜間小学校では、単に文字や知識を暗記するのではなく、子どもたちが活発に授業に参加して楽しめるように授業内容が工夫されている。また、グループワークや遊びを通して子どもを重視しているほか、子どもの一人一人の習得速度に合わせて授業が進んでいく。

学ぶのは実際の社会で生活し、生きていくために不可欠な知識と技術の習得。清潔な水、保健、衛生の基礎知識や麻薬、アルコール、エイズ・H



I Vの予防に対する正しい知識などの習得と実践的な内容となっている。

この日は、子どもたちが飲み水と下痢の関係を勉強していた。どうしたら清潔で安全に水が飲めるのか。子どもたちは、日常生活に密接な内容だけに、自分の意見を活発に出していた。

夜間小学校の授業は、6月から翌年2月までの9か月、授業は週3回で1時間ずつ行われる。このクラスの特徴は1つのクラスに先生が3人、そして、年齢も生徒に近い20代ばかり。大半の子どもたちは、一度学校を辞めているので、先生に子どもに対する愛情と理解がなければ、すぐ来なくなってしまうという。

夜間小学校で学ぶ子どもたちに将来の夢を聞いたが、9割が働いて親の面倒を見ることと答えた。具体的な職業を答えたのは、エンジニアと答えた男の子1人だった。カンボジアやラオスの農村で子どもたちに同じ質問をすると、たいいていは、先生、医師、看護師、警察官、軍人といった答えが返ってくる。

夜間中学、夜間高校、夜間大学ではなく、夜間小学校が全国各地に存在するビルマの現実に言葉を失った。長年に渡る軍事独裁政権による政治と経済の混乱の影響はこうした子どもたちの教育にも反映されていた。救いだっただのは、薄暗い教室の中で学ぶ子どもたちが本当に真剣で楽しそうに勉強していたことだった。また、教師たちの子どもの教育にかける真摯な熱意が伝わってきたことだ。

また、ビルマでは伝統的に僧院が日本でいう寺子屋教育の役割を担ってきた。現在でも全国に1,402校の僧院学校がある。貧困層の子どもたち

の教育を行うために、僧侶や地域住民のお布施や募金で学校を建設して学校を運営している。

2012年5月には新聞や出版物に対する検閲制度も廃止された。また、インターネットや携帯電話の所有やアクセスも大幅に改善された。一方、少数民族との和平や真のさらなる民主化に関しては課題も多々残るビルマ。

在ビルマの日本大使館訪問の際に、アウンサンスーチーさんが日本に対する援助の中で希望するのは、子どもたちに対する移動図書館車事業と水の援助ということを知った。さらにスーチーさんのイギリス時代からの親しい日本の友人からもアジア各国で30年の経験を持つSVAに対して移動図書館活動を支援して欲しいと相談を受けた。移動図書館は、スーチーさんの亡き母の願いでもあったという。スーチーさんの友人と私の日本人の友人が共通の友人という偶然も重なった。

アジアの中でも識字率80パーセントと途上国の中では極めて高い識字率を誇り読書好きの国民性を持つビルマ。今後、ビルマの未来を担う子どもたちの教育分野に対する必要性を痛感したビルマ訪問だった。SVAは、2013年からビルマ難民キャンプやアジア各国での30年間の教育、文化支援活動の経験を生かしてビルマ国内での本格的な教育支援を目指して活動を行う計画だ。

参考

本文では、ビルマを使用させて頂きました。ヤンゴンに関しては、ラングーンではなく一般的なヤンゴンを使用しています。